ピース・ウイング長崎 会報

へいわ

103号

■財団法人長崎平和推進協会 〒852-8117 長崎市平野町7番8号 ■電話(095)844-9922 FAX(095)814-0056
http://www.peace-wing-n.or.jp

■アジア青年平和交流スタート
■平和案内人育成講座経過報告
■エッセイ・碑巡り・祈念館のPR紹介
■長崎市少年平和と友情の翼
■平和宣言・式典会場周辺写真紹介
■祈念館だより・お知らせ

ナガサキ学生平和ボランティア主催のハト(8,10)会議。アジア青年平和交流事業で長崎を訪れた韓国青年も参加しました。

16年度

アジア青年平和交流スタート

8月7日韓国青年が来崎

去る8月7日（土）に韓国人青年7名が長崎に到着し、いよいよ「アジア青年平和交流」がスタートしました。

翌8日（日）には、日韓双方の青年計14名が追悼平和祈念館会議室に勢揃いし、丸田事務局長の挨拶の後、各々自己紹介を行った後、原爆資料館、追悼平和祈念館を見学しました。午後の被爆者との交流会では、継承部会長の和田さんと副部会長の原田さんの被爆体験講話に全員が熱心に聞き入っていました。

9日（月）は、平和祈念式典へ参列した後、青少年ピースフォーラムの碑巡りに参加しました。落下中心地や浦上天主堂などで被害状況について説明を受けた青年達はあらためて原爆の悲惨さを認識したようでした。

10日（火）には、ながさき学生平和ボランティア主催のハト（8・10）会議に参加しました。会議では、「平和のために私ができること」などについてグループ討議を行い、青年達も積極的に意見を述べ、討議内容の発表の場でも自分達の考えをはっきりと主張していました。

11日（水）は、ハウステンボスを訪れた後、夜には、ながさき式見ハイツでフェアウェルパーティーが行われました。パーティーには韓国人青年のホームステイ先のホストファミリー、協会の理事長や副理事長等が出席し、日本と韓国の生活や文化などに関する話題で大変盛り上がりました。

最終日の12日（木）の午前中には恵の丘原爆ホームを訪問し、青年達が歌を披露したり、韓国の遊びやゲームを紹介しました。また、入所者の方との語らいの時間も設けられ、青年達は、ここでの交流を通じて、平和の大切さについて実感し、これから自分が何をすべきかについて真剣に自分自身に問いかけていたようでした。

日本青年訪韓8月21日～27日

応募者16名の中から選抜され、事前研修を行った7人の青年は8月21日（土）、アジア青年平和交流事業のため長崎を発し福岡国際空港を経由し、韓国の釜山に着きました。釜山では、長崎で交流（8月7日～12日）した韓国の青年の熱い歓迎を受けながら、韓国の窓口である（社）釜山国際親善協会の理事長と、当協会の丸田事務局長からあいさつと本事業の趣旨、意義などを聞きました。

22日（日）は釜山近郊にある近代歴史館や市立博物館を見学し、日本と韓国が昔からとても深い関係を持ってきたという歴史に青年たちは驚きを隠しませんでした。23日（月）は韓国の広島と言われるハプチョン（陜川）原爆被害者福祉会館を訪問しま

午後には、21日（土）からの韓国での再会を誓い合い、青年達は元気に帰国の途につきました。

した。そこには約76名の被爆者が生活しており、両国の青年と楽しい交流会を行いました。日本で被爆し韓国に住む被爆者の苦労や原爆がもたらした悲惨さをもう一度実感することができました。24日（火）は独立記念館を見学しましたが、そこには近代日本が行った韓国に対する加害や抑圧の歴史とともに、日本の植民地下で独立を熱望した韓国民がはらった努力や様々な資料などが展示されていました。真剣に見ていた日本青年たちにとっては大きく心に響くものがあったと思います。

25日（水）は「日韓の相互理解のために私ができること」をテーマとした平和シンポジウムが開催（釜山外国語大学内）され、基調講演をはじめ、両国の青年から原爆や平和に関する様々な考えを聞くことができました。26日（木）は全日程が終了し長崎に戻ることになりましたが、空港では今までの交流会を通してできた両国の青年たちの熱い友情を感じました。これからは、両国の青年がお互いに共に生きる道を感じ、一緒に平和な世界に向け歩んでいくことを望みます。

▲釜山平和シンポジウムの様子（発表者は中村麻美）

▲日本青年の韓国着の様子（韓国・釜山国際空港）

平成十五年度 役員会
決算と事業報告が承認されました。

平成十六年五月十八日に評議員会、五月二十六日に理事会が開催されましたが、その中で平成十五年度の協会の決算並びに事業報告が行われ、承認されました。平成十五年度は協会が創立二〇周年を迎えたことや追悼平和祈念館が開館したことで例年と比較しても盛りだくさんの事業が行われました。

一般事業としては、日本の若者と韓国の若者が、お互いの国を訪問し、文化・歴史を学び、現地の人々との意見交換や交流を通して平和意識の向上を図ることを目的とした「アジア青年平和交流事業（十五年度決算額…2、008、302円）」が実施されました。この事業は、平成十六年度も実施しましたが、本事業は参加者からも好評を得ています。その他の事業としては、二〇周年記念事業として平成十六年二月十六日（月）に「美輪明宏講演会（十五年度決算額…2、731、113円）」を実施しました。

受託事業は、平成十四年度から受託した国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館運営事業に加えて、平成十五年度は「長崎原爆資料館展示ガイドモデル事業」を長崎市から受託しました。この事業は、原爆資料館の各展示について、来館者の理解を深めてもらおうとガイドを配置して説明をおこなうもので、平成十六年度も継続して行われている事業です。

また、追悼平和祈念館は平成十五年七月に開館しましたが、七月六日の開館から平成十六年三月末時点での入館者は69、354人であり、多くの方々に追悼のために訪れていただきました。平成十五年度の追悼平和祈念館の事業は、七月までは開館のための準備がメインでしたが、開館してからは平和ボランティア育成外国語講座や被爆医療協力事業の一環として、十月の国連軍縮週間時に「アレクセイと泉」映画上映会を実施しました。

平成十五年度も会員の皆様の協力を得ながら多くの事業を実施することができました。本年度も多くの事業を実施する予定にしておりますので、ご期待ください。

長崎市少年平和と友情の翼

平成十六年度「長崎市少年平和と友情の翼」事業について（報告）

「長崎市少年平和と友情の翼」事業は、本年で九回目を迎える事業です。この事業は、長崎市内に住む小学五、六年生の男女三〇名と中学生の男女三〇名が、同じく那覇市内の小中学生六〇名と沖縄県内の戦跡巡りや研修・交流活動を通して相互の友情を育み、平和の尊さを学ぶものです。

本年度も7月11日（日）～7月12日（月）の二日間に日吉青年の家に宿泊しての事前研修。7月21日（水）～7月24日（土）の四日間にわたり沖縄研修が行われました。事前研修においては、原爆資料館の見学や平和公園周辺の碑めぐりを実施。那覇市の市民平和交流室から職員を招いての沖縄の歴史や文化、そして太平洋戦争末期の地上戦の様子などの講話をしていただきました。市内全域から集まった初対面の子供たちは、最初は戸惑いながらも次第にうちとけ、事前研修が終わる頃にはたくさんの友達をつくることができたようです。

沖縄研修は、7月21日の原爆資料館ホールでの出発式からはじまりました。最初に永江和正団長（長崎市教育委員会管理部長）による挨拶のあと、団員全員による出発のエールを行い、沖縄に向けて出発しました。

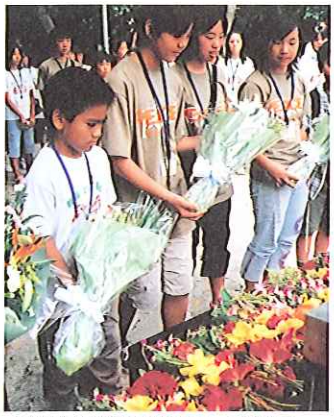
研修一日目は、「沖縄の歴史」をテーマにしています。那覇空港到着後は、昨年8月に開通した「ゆいレール（モノレール）」に乗車し、終着駅の首里駅まで移動しました。ゆいレールからの眺めは那覇市の中心地を一望でき参加した子供たちからは大変好評のようでした。首里駅到着後は、最初の目的地である首里城公園まで徒歩で移動しました。首里城は、本土にある城とは違い、中国の影響をうけた建築物であることから、子供たちも興味深そうに見学していました。一日目の夜は、ひめゆり学徒隊生存者の講話を聴きました。戦争中、常に生死のはざまに立たされていた学徒隊の話を聴いて、子供たちも「平和」の大切さを感じとったようです。

研修二日目は、那覇市内の小中学生60名と一緒に沖縄県の戦跡巡りを行いました。今年は那覇市内の垣花（カキノハナ）小学校と鏡原（キョウハラ）中学校に参加していただき、目的地に移動するまでのバスは、長崎と那覇の子供ができるだけ早く友達になれるように、座席の配置を那覇と長崎の子供同士、隣あわせにしました。二日目は、糸数の壕、平和祈念資料館、平和の礎（いしじ）、ひめゆり資料館、シュガーローフを見学しました。戦跡巡りのあとは、宿泊先の都ホテルに戻って那覇の子供たちと交流会・食事会を行いました。交流会では、那覇と長崎双方の子供たちが混じりあってゲームを行い、その後の食事会では、那覇市の子供による空手の演舞などをはじめとする催しが行われ、長崎からも「長崎ぶらぶら踊り」を披露しました。長崎と那覇の子供たちとの交流は、この一日だけでしたが、限られた時間を子供たちは大変、有意義に過ごしていたようです。

研修三日目は、「沖縄の自然」をテーマに、平成14年12月に開館した「沖縄美ら海水族館」の見学と恩納（おんな）村（そん）のムーンビーチホテルでの海水浴を楽しみました。沖縄は珊瑚礁をはじめとして自然が美しいところでもあります。水族館では、沖縄地方にしか生息しない魚や大型水槽の中の数多くの美しい魚などを目にすることができました。午後からの海水浴では、長崎の海の色とはまた違った海の色と水の感触を子供たちは感じとっていたようです。

最終日の四日目は、「沖縄の文化」をテーマに「琉球村」と公設市場を見学しました。「琉球村」は沖縄の様々な文化にふれる施設で、子供たちは、シーサーの絵付け等も行って、沖縄の文化を体験しました。午後からは、公設市場で沖縄の食文化に触れたり、お土産を買ったりして最後の一時を過ごしました。

四日間の沖縄研修で子供たちは、平和学習もさることながら沖縄の歴史や自然、文化にも触れることができましたが、これらの自然や文化はすべて「平和」が根底になければ体験できません。当協会としては、この四日間の研修をとおして、子供たちが平和の大切さを感じとってくれたと思っています。



▲ひめゆりの塔前で献花する一行の代表

【平和案内人育成講座経過情報】

被爆体験の継承へ向けて

～平和案内人育成講座　第1期講座終了～

5月25日に開講した平和案内人育成講座は、被爆者の高齢化に伴い、被爆体験を次世代へ継承するために実施しているもので、全日程の終了後には「平和案内人」としてガイド活動を予定しています。前号の「へいわ」では講座のカリキュラムをお知らせしましたが、今回は講座実施の様子についてお伝えします。

平和案内人育成講座の受講申込者は92名、毎回約70名という出席率の高さです。また、年齢は最年少が19歳そして最高齢が84歳という幅広い年代から構成されています。年齢もさまざまで、受講の動機もさまざま。「長崎に住んでいる以上何かやらなければ」という思いのかたや「被爆者でありながら、原爆について知らなさすぎる」ために学習したいというかたなどもおられます。7月27日の第9回講座をもちまして、原爆や平和に関する基礎知識を身につける第1期の内容が全て終了しました。受講生は非常に熱心に講座に取り組んでいます。

第1回目の講座では、79名が出席、案内人となるための意気込みが感じられる真剣な表情での参加です。舩山副理事長による「感性と理性の両輪で、聞く人に理解し、納得してもらえるような平和案内人になっていただきたい」との期待に、受講生も気をひきしめます。

継承部会員による被爆体験講話は2度行われました。被爆者でない受講生が多く、被爆者の心情を引き継ごうと懸命に講話に耳を傾けます。また、この被爆体験講話以外にも被爆者の証言ビデオを借りて何人もの証言を聴いているかたもいます。

「放射能と原爆後障害」、「原子爆弾の原理と破壊力」など、科学的に原爆の威力と影響を学ぶ機会もありました。長崎大学の教授をお招きしての専門的な講義で非常に難しい内容でしたが、案内人としての言葉に説得力を持たせるためには必要な知識、と必死に理解に努めます。

「現代の核問題と平和」では世界の軍縮の動きや国際情勢など、難しい内容を元長崎大学学長の土山先生にわかりやすく講義していただきました。

また、特別講演として女優の渡辺美佐子さんに「思いを伝える～原爆朗読劇を通して」という演題でご講演いただきました。被爆者ではない渡辺さんが原爆朗読劇を20年も続けることになったきっかけや、感情のこもった詩や手記の朗読で、被爆体験が無くても伝えることはできるのだという自信と感動を与えられました。

この他にも多数の貴重な講義が行われ、そのどれもが受講生の平和案内人としての糧となっていることと思います。

この70名あまりの受講生が平和案内人として活躍する日も遠くありません。被爆体験の継承に向け、これからも学んでいただきたいと思います。

平和宣言

Peace Declaration

長崎市長 伊藤一長

はたして世界のどれだけの人が記憶しているでしょうか。59年前の今日、8月9日、午前11時2分、米軍機から投下された一発の原子爆弾によって、まちは一瞬にして廃墟と化しました。死者7万4千人、負傷者7万5千人。現在の長崎は、美しい街並みとなり、国内外から訪れる人で賑わい、人々は個性ある伝統と文化の中で暮らしています。しかし、このまちには、高齢に達した今もなお、原爆後障害や被爆体験のストレスによる健康障害に苦しみ続けている多くの人々がいるのです。そのような長崎市を代表する者として、すでに亡くなられた方々の苦しみをも深く思いつつ、世界に強く訴えます。

アメリカ市民の皆さん。59年間にわたって原爆がもたらし続けているこの悲惨な現実を直視してください。国際司法裁判所の勧告的意見は、核兵器による威嚇と使用が一般的に国際法に違反することを明言しています。しかし、アメリカ政府は、今なお約1万発の核兵器を保有し続け、臨界前核実験を繰り返しています。また、新たに開発しようとしている小型核兵器ほ、小型といっても凄まじい威力を持つものです。放射線障害をもたらす点では、長崎に落とされた原爆と違いはありません。世界の超大国が、核兵器に依存する姿勢を変えない限り、他の国の核拡散を阻止できないことは明らかです。アメリカ市民の皆さん、私たち人類の生存のために残された道は、核兵器の廃絶しかないのです。今こそ、ともに手を携えてその道を歩みはじめようではありませんか。

世界の皆さん。今、世界では、イラク戦争やテロの頻発など、人間の生命を軽んじる行為が日常的に繰り返されています。私たちは、英知を集め、武力ではなく外交的努力によって国際紛争を解決するために、国連の機能を充実・強化すべきです。来年は被爆60周年を迎えます。国連で開催される核不拡散条約（NPT）再検討会議へ向け、平和を願う一般市民やNGOなど、地球市民による連帯の力を結集し、非人道兵器の象徴ともいえる核兵器の廃絶に道筋をつけさせようではありませんか。

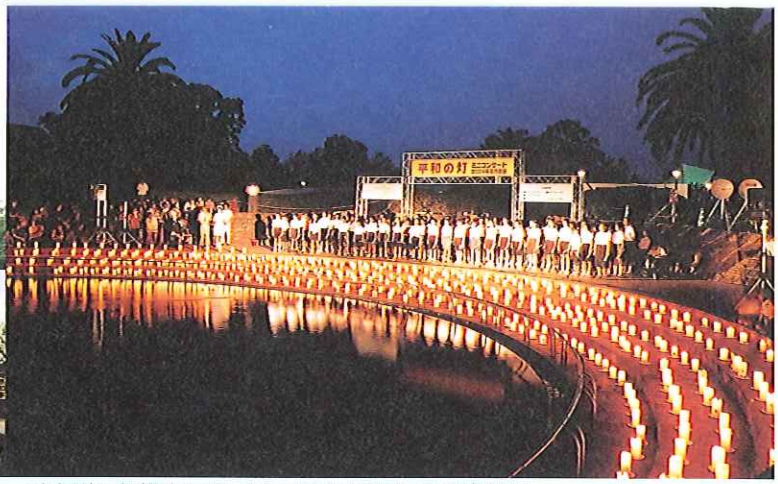
日本政府に求めます。日本国憲法の平和理念を守り、唯一の被爆国として、非核三原則を法制化すべきです。この非核三原則と朝鮮半島の非核化を結びつけることによって、北東アジア非核兵器地帯を生み出す道が開けます。それは同時に、日朝平壌（ピョンヤン）宣言の具体化にも合致し、また、日本自らが核兵器に頼らない独自の安全保障のあり方を求めることにもつながるのです。

若い世代の皆さん。今、長崎市では、被爆の実相や命の尊さを学ぶことにより、多くの若者たちが平和について考え、自ら行動するようになりました。私たちは、混迷を深める世界情勢の中にあって、この若者たちの情熱に希望の光を見いだしています。一人ひとりが平和の問題に関心を持ち、身近なところから行動することが、核兵器の廃絶と世界平和の実現につながるのです。長崎市は、これからも被爆体験を継承し、平和学習の拠点都市として、平和の大切さを発信し続けます。そして、皆さんとの強い連帯が生まれることを願っています。

被爆59周年にあたり、原爆で亡くなられた方々の御霊の平安を祈りつつ、長崎市民は、核兵器のない真の平和な世界を実現するために、たゆまず努力することを宣言します。

2004年（平成16年）8月9日

▲コーラス“千羽鶴”を捧げる純心女子高校の皆さん



▲市内の小・中学生の手で作られたキャンドルが灯された平和の泉周辺

平和への祈りと願いをこめて

▲花輪を捧げる小泉首相

◀犠牲者の哀悼と平和を願い
全国から寄せられる千羽鶴
（平和祈念像前）

◀平和宣言を読み上げる
伊藤一長長崎市長

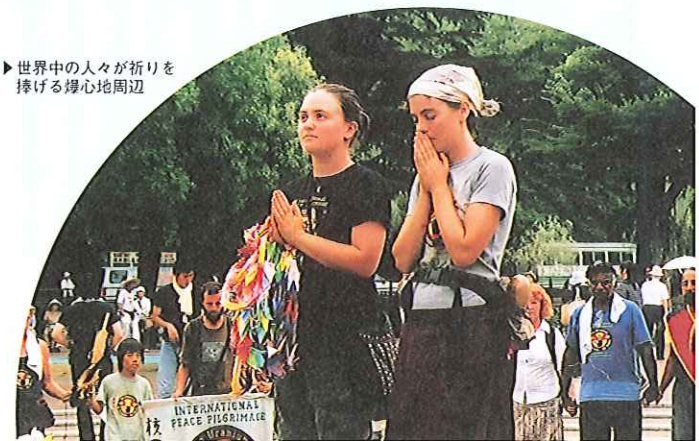
▶式典会場には毎年多くの
外国の人たちが訪れます
（平和祈念像前）

▲山里小学校で行われる祈念式典（長崎市立山里小学校）

▲祈念式典の模様が実況放送された追悼平和記念館交流ラウンジには、昨年以上の人たちが追悼に訪れました。（国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館交流ラウンジ）

▼青少年ピースフォーラムで平和の考えを述べ合う子どもたち（平和会館）

▶世界中の人々が祈りを
捧げる爆心地周辺



【写真提供：長崎市広報課】

平和推進協会の存在意義を高めたい

長崎平和推進協会
事務局次長
永田博光

今年の4月、長年勤務していた長崎市平和推進室から長崎平和推進協会の事務局次長として赴任いたしました。国際文化会館がまだこの平野町の地にあったおよそ10年前、私は、同館の職員であると同時に当協会の仕事も兼務していました。久しぶりに戻ってきた懐かしい思いとともに、当協会が原爆資料館の一部業務や国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の管理運営業務を受託することにより、仕事の幅が広がりそれに伴って組織としても大きくなっていることなど、その変化に驚いています。

■被爆体験が原点

その中で、継承部会や写真資料調査部会の皆さんとお会いするにつけ、被爆者の高齢化が一層進み、被爆体験の継承が正に深刻な問題になりつつあることを痛感しています。

長崎は広島とともに唯一原爆による惨禍を体験した都市として、このような悲劇がけっして繰り返されることのないよう、一日も早い核兵器の廃絶を訴え、世界平和の実現を願い続けてきました。その原点は「被爆による実体験」です。体験を語ることのできる被爆者が年々少なくなりつつあることは避けられないとはいえ、そのことによって核兵器廃絶を求める運動が停滞してはなりません。最も説得力を持っている被爆者の声が発せられる今のうちに、将来を見据えながら、被爆地の市民が手をとりあって核兵器廃絶への活動をより強めていく必要があります。そこに当平和推進協会としての最大の役割があるものと思います。

そのような意味で、被爆の実相を伝えるボランティアガイドを育成する「平和案内人育成講座」やインターネットを活用して遠隔地の子供たちに被爆体験を語りかける「ピースネット」、長崎とアジアの青年が互いの国を訪問し意見交換を行う「アジア青年平和交流事業」などの新たな事業には、時宜を捉えた意義があると感じています。

■核兵器の現状に注意深く…

しかし、近年、ことに2001年9月11日にアメリカで起きた同時多発テロ以降、私達を取り巻く国際的な動きは大きな変化をみせています。アメリカは「核態勢の見直し」を行い、核による先制攻撃の可能性や、地下軍事施設への攻撃を意図した新たな小型核兵器の開発、そしてそのためには核爆発実験の再開もあり得ることなどを表明しています。

一方では、ロシアのずさんな核管理に伴うテロ組織への核技術や核物質流出の懸念、イスラエル、インド、パキスタンに加え北朝鮮やイランにも核兵器開発の疑惑がもたれるなど、新たな核拡散の危機が訪れ、今や核不拡散条約（NPT）の崩壊も懸念されています。私たちは、このような核兵器を巡る現状を注意深く見つめておく必要があります。

■市民の力で世界は動く

かつて杉並区の主婦グループから始まった世界的な「原水爆禁止運動」や核兵器の違法性を問う「世界法廷運動」が一主婦の台所から生まれたことなど、市民の日常的な活動が国際政治に大きな影響力を発揮した事実があります。このことは、市民で組織する当協会にも世界を動かせる可能性があることを教えてくれます。

被爆者の苦しみが二たび繰り返されることのないよう、私達が、核兵器の廃絶に逆行する動きには厳しく発信していくことは大変重要ではないでしょうか。

核兵器廃絶は長崎市民の共通の願いです。被爆地の願いを粘り強く訴え続けていくことによって、より多くの市民の理解と参加を得、当協会の存在意義を高めていけるよう努力していきたいと考えています。

【碑巡り】

慰霊碑巡りを開きました

継承部会碑巡り班

59回目の原爆の日を目前にした7月25日（日）、当協会継承部会「碑巡り班」のみなさんの案内で、あの日と同じ暑さを感じながら、浦上のまちに残る原爆遺跡や慰霊碑を巡ることになりました。

強い日差しの中、午前9時50分、扇町バス停前に50名程の市民が集まりました。

参加者は、思い思いの暑さ対策を考えた服装で、今日の案内役である「碑巡り班」班長の室園さんの後に付いて行きました。

暑い、暑いとおもわず口にしながら、石神公園にある「無名原爆死者之碑」を振り出しに、「こららんば墓地」、「浦上養育院」、「聖ヨゼフ堂の碑」と巡り、「浦上第一病院跡」（現：聖フランシスコ病院）へ着きました。

聖フランシスコ病院前では、被爆直後から救護活動に奔走し、当協会の設立に貢献され、現在は当病院で入院加療中の秋月先生の回復を全員で祈りました。

その後、被爆者の方々が涌き水を求めて集まった「ルルド」で休息を取り、高尾町赤城墓地を巡り、「常清高等実践女学校跡」（現：信愛幼稚園前）で解散しました。

2時間程の慰霊碑巡りでしたが、参加者のみなさん、案内役の「碑巡り班」のみなさんともに汗だくになり、浦上の丘を巡りながら、それぞれが平和の大切さや命の重さを改めて考えさせられる一日となりました。

暑い中を疲れた様子も見せずに全身汗を流しながら、熱心に説明をしていただいた室園さんをはじめスタッフのみなさんに感謝します。

【ステーションビジョン】

長崎駅「かもめ広場」追悼平和祈念館をPR

長崎駅「かもめ広場」に立つと目の前に大きなスクリーンがあります。1日42回祈念館のコマーシャルが流れているのは御存知でしょうか？

祈念館は開館1年目で来館者が9万5千人（7月5日現在）となっております。

開館前の予測に反し、入館者数があまり伸びていません。開館当初、祈念館は被爆者およびその家族の方々に原爆死没者の冥福や永遠の平和を静寂の中で祈っていただく空間として設立されており、来館者が騒然と訪れて、清らかな祈りの時空を壊してはならないとの思いが職員の根底にありました。しかしながら報道等により入館者の少なさが指摘される中、職員はその葛藤に悩みつつPRを考えています。祈念館の名称や役割は他県の人たちにはまだまだよく知られていないのかもしれません。

祈念館に最も近い路面電車の「浜口町」電停にも祈念館の看板を掲げ、資料館と併せて来館していただけるように案内をしています。

より多くの方に来館いただき、一人ひとりが紹介者となってこの空間のすばらしさを伝えていただくよう、事務局一同努力してまいります。

祈念館だより

開館1周年記念・追悼平和祈念ラウンジコンサートを開催しました

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館は、原爆で亡くなられたすべてのかたを追悼し、永遠の平和を祈念する目的で、昨年7月6日に開館しました。

入館者数は当初の予想より若干少ない感はありますが、遺族のかたをはじめ、観光客の皆様などにご利用いただいた結果、7月末をもって10万人を超え、認知度が少しずつ高まっているように思います。

開館1周年を機に、さらに多くの方々に来館していただき、平和への願いを新たにしていただこうと、7月10日に「追悼平和祈念ラウンジコンサート」を開催しました。世界的ギタリスト・山口修さんと、妻の歌手・純子さんによる、黒人霊歌やクラシック音楽が会場いっぱいに響きわたると、大きな拍手が送られました。その後、二人の奏でる音楽にあわせて、版画家・小崎侃さんが、原爆俳人・故松尾あつゆきさんの句をテーマにした墨絵による俳画や、山頭火の句を題材にした作品を描き、観客の方々は音楽と絵と詩の世界に一度に惹きこまれていた様子。原爆死没者への追悼の思いを深めていました。

今回、はじめて祈念館を訪れた方が多く、コンサート終了後、館内を見学していただきました。今後も、このような催しを通して多くのかたに祈念館を知ってもらいたいと考えています。

大型遺影3面モニターができました

祈念館では、原爆死没者の遺影を募集し、公開しています。

これは、原爆によって、子どもからお年寄りまで多くのかたが亡くなった事実を、数字だけでなく顔写真で表すことで、来館者のかたに死没者一人ひとりの存在を実感し、そのご冥福を祈っていただくためです。

お寄せいただいた遺影は、これまで、地下2階「遺影・手記閲覧室」にある検索用のパソコンと、「追悼空間前室」の追悼テーブルでご覧いただいておりましたが、今回新たに「追悼空間前室」に大型遺影3面モニター（縦：約50cm×横約90cm×3面）を設置し、大画面でご覧いただけるようになりました。

既存の「追悼テーブル」と比較して、死没者のお顔が大きくなり、大変見やすくなったとともに、追悼空間に入る直前のお部屋で、死没者への思いを一層深めていただくことができるようになりました。

広島祈念館に寄せられたかたの遺影の公開を始めました

「遺影・手記閲覧室」のパソコンで、登録された氏名や遺影をお一人ずつ検索し、ご覧いただいておりましたが、この度、広島祈念館にお寄せいただいた遺影や氏名についても当館で閲覧いただけるようになりました。

今後も広島・長崎両祈念館の特徴をいかしながら、相互の連携のもとに、多くの情報を提供し、来館者にとってより利用しやすい施設を目指します。

被爆60周年にあわせて、被爆資料・遺影・体験記を募集します

被爆から60年が経過しようとする今、被爆者やその遺族のかたの高齢化が進み、被爆の状況を物語る資料の収集や、被爆の体験を伝えてもらうことが難しくなりつつあります。

そこで、広島・長崎が一つになり、「被爆資料・遺影・体験記」を全国に呼びかけて募集します。後世に平和を訴え続けるための資料とするために、この機会にぜひ寄贈していただきますよう、ご協力ください。

問合せ先

長崎原爆資料館（電話095-844-1231）〔被爆資料〕
国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館（電話095-814-0055）〔遺影・体験記〕

平和推進協会初代理事長 秋月辰一郎先生の「長崎原爆記・死の同心円」のアニメ映画化決定

1945 NAGASAKI－アンジェラスの鐘－

（有原誠治監督、虫プロ制作・関西プロデュースセンター企画）

破壊されながらも浦上の原野に残った唯一の浦上第一病院（現聖フランシスコ病院）が舞台。ただ一人の青年医師秋月と病院スタッフの献身的医療が開始される。やがて被爆者は、放射線による急性原爆症の魔手に倒れはじめる。被爆距離による「死の同心円」に愕然とする秋月。疲労困憊の中、2度までも使用された原爆の非人道性に苦悩する秋月医師。8月15日の終戦、そして台風一過、生き延びた人々に回復の兆しが見られ、草花、鳥たちが再び現れる感動のシーン、医薬品のまちにまった到着、戦争で収容されていた外国人神父たちの帰還、病院再建の槌音が聞こえるシーンが最終章となる。

しかし、冷戦は原爆の数百倍の水爆開発競争をもたらす。原爆後遺症が被爆者を悩ます。秋月医師はついに自らの原爆体験記を猛然と執筆し、被爆者の先頭にたって団結を呼びかけ、長崎平和推進協会を創設する。その活動のさなか、重い喘息発作に倒れ、意識のないまま今も核廃絶運動のシンボルであり続ける。

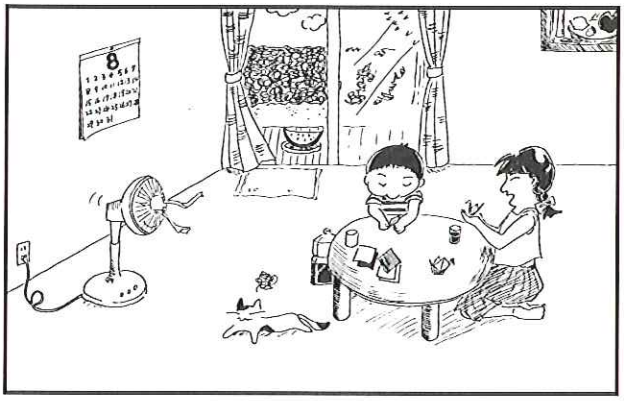
虫プロの創始者、手塚治さんも医師でした。彼の「鉄腕アトム」は核時代の申し子で、人間のために働きます。彼の意思を受け継ぐ監督の有原誠治さんは、広島の千羽鶴の主人公、白血病で亡くなった佐々木禎子さんをモデルにした作品「つるにのって」で世界的に知られた方です。

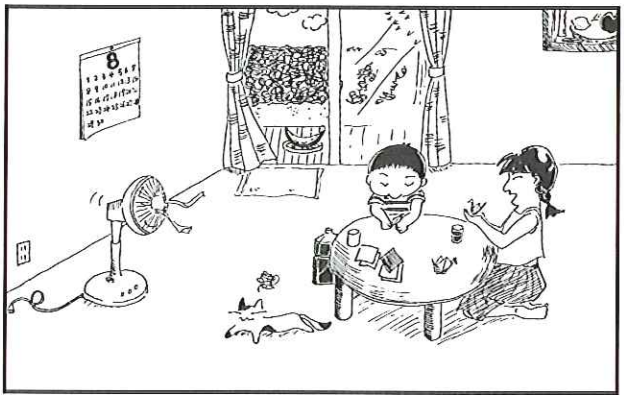
長崎平和推進協会は、原爆60周年記念として「1945 Nagasaki －アンジェラスの鐘－」の作製を支援します。会員・市民の皆様の御支援をお願い申し上げます。

平和推進協会副理事長
朝長万左男

パズルでグッズプレゼント

今回は、8月の風景のまちがいさがしです。上下の絵をよ～くみくらべて、違っているところを8つ探してください。その間違いを8つともハガキに文で書いて、お送りください。（例：カーテンの模様が水玉に代わっている…など）。
正解者の中から抽選で10名様に、「リボン－ribbon」のCDをプレゼント。
9月30日必着　※印刷のかすれ、にじみ等はまちがいに入りません





「リボン」…昨年9月に亡くなった長崎市出身の歌手、槙健一さんが被爆地長崎から平和を希求する心を歌い上げた曲。

＜応募方法＞
官製はがきにクイズの答えと住所、氏名、電話番号、会報へいわの感想をお書きの上、〒852-8117　長崎市平野町7-8　（財）長崎平和推進協会「へいわ」103号プレゼント係までお送りください。正解者の中から抽選で10名様に「リボン－ribbon」のCDをプレゼントします。なお、当選者の発表は商品の発送をもってかえさせていただきます。

＜102号の答え＞うさぎ

被爆地長崎市民の
核兵器廃絶の思いを国連へ
高校生平和大使国連欧州本部へ出発

被爆地である長崎から、核兵器廃絶と平和のメッセージを届ける「高校生平和大使」一行が8月16日(月)、訪問先である国連欧州本部へ向けて出発しました。

大村城南高校
3年
津田麻友子さん

純心女子高校
2年
小川　綾華さん

7回目となる今年は、津田麻友子さん（大村城南高校3年）と小川綾華さん（純心女子高校2年）の二人が、平和のメッセージとともに、全国の高校生から寄せられた署名簿を19日、スイス・ジュネーブの国連欧州本部に届けます。

若者の素直で柔軟性のある発想と、力強い行動にこれからも期待したいと思います。

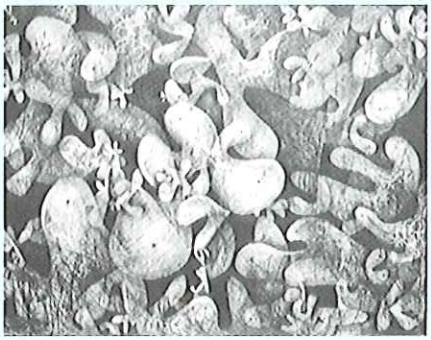
高校生平和大使は、国連欧州本部のほか、英国・フランスを経て、8月26日に帰国予定です。

シリーズ
8.9展出展作紹介
「うまれるものたち」

祝利恵子さん（長崎市滑石在住）

鉛筆で描いています。ここ6・7年、鉛筆が一番合うようです。

今年もまた、心の中を空にして新たに向います。（作者談）



会員募集

当協会は、被爆地長崎の使命として官民が一体となって、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現に向け、各種の平和推進事業を展開しております。

平和な環境を守り、育て、さらに前進させるために、できるだけ多くの方々にパートナーになっていただき、事業を推進していきたいと考えております。

お知りあいの方々に声をかけていただき協会の輪を広げるために、皆様方のご協力をお願いします。

（事務局にご連絡くだされば案内書を送付いたします。）

ご寄附ありがとうございました

・（財）広島県相互扶助会
（五万円）
・多賀町立多賀中学校
（五万二千七百四十二円）
・古場田政治（一万円）
・土田昭子（二万円）
・日野町立日野中学校修学旅行
一同（一万千六百三十四円）
・葉山利行（一万円）
・社会福祉法人ケアハウス桜花苑入居者・職員一同（八千円）
（敬称略）

賛助会員のご紹介

協会の趣旨に賛同していただいている賛助会員のうち、関係団体及び企業関係をご紹介させていただきました。ご支援、まことにありがとうございます。

・（株）理研サービス
・（株）プロダクションナップ
・ダスキンレントオール長崎ステーション
・松下電工エンジニアリング（株）
・（株）日立ビルシステム九州支社　長崎（営）
・デンケンエンジニアリング（株）
・日本放送協会長崎放送局
・（株）長崎新聞社

会員数報告

維持会員	一、〇九九名
賛助会員（団体含）	一二七名
臨時会員（学生含）	九名
合　計	一、二三五名

平成十六年八月五日現在

平成十六年九月十四日発行
印刷　株式会社　インテックス